



## 南アフリカでの ホームステイ

佐藤 千鶴子

さらに、週末や冬休みには、車で三〇分ほどのガールフレンドの実家から彼女の娘、複数の姪と甥、ときには妹とその娘（一歳）など少ない時で二人、多い時には四〜五人がやってきて寝食を共にした。友人が市内の旧白人地区に購入した3LDKの一軒家には、幼児から十代半ばの子供達が溢れていて、いつもにぎやかだった。友人は出張が多く留守がちだったため、私はガールフレンドや子供達と多くの時間を過ごすことになった。英語があまり話せない子供達との交流は、現地語の習得というホームステイの目的に叶っていたが、自分の時間がもてないという難点があった。

子供が四人もいると、日常の家事をこなすだけでも大変ではないかと思うが、実際には家事はうまく分担されていた。おそらく生活費や教育費を援助してもらった対価としてだと思うが、高校生の姪は、洗濯の手伝い（洗濯機がないので、一番大変な家事である）や食事の支度、幼児の世話などよく働いた。小学生の甥も、毎日、学校から帰ると一つしかない制服のシャツを自分で洗い、夜か翌朝にアイロンがけをしていたほか、食器洗いも彼の担当だった。友人もガールフレンドも彼らの労働を当然のことと考えているようだったが、小学三年生の男の子に毎晩の食器洗いをさせることを不憚に思った私はよく彼の仕事を手伝った。

友人宅での生活で大変だったのは、食費と食材の調達である。友人一人の稼ぎで、一家六人の生活費がほぼ全額カバーされなければならなかった。そのため食材は、主食のメイズ粉や米など必需品を中心に保存がきくものを一度に大量に購入し、牛乳も長期保存がきく種類のものを買うことが多かった。毎日買うのは、子供達が昼食に持っていく食パンぐらいである。私は

食費込みの部屋代を払っていたので食材を調達する義務はなかったが、肉や野菜、果物などの生鮮品や甘い菓子パンなどを定期的に差し入れた。月の半ばや月末には、食糧庫や冷蔵庫が空っぽのこともたびたびだったからである。南アフリカは果物の種類が豊富な国だが、友人宅では果物は贅沢品で滅多に食べる機会がなかった。

気苦労や不便なこともあったが、友人宅での暮らしは総じて楽しかった。特に、年頃の姪二人と恋愛や勉強、将来について話をする事ができたのは貴重な経験だった。友人もガールフレンドも、姪に対して「恋愛はご法度」と頭ごなしに禁じ、それ以上は議論の余地がないという態度だった。南アフリカでは妊娠が学校をドロップアウトする主要原因の一つであり、ガールフレンド自身も高校生の時に最初の子供を身ごもった結果、高校を退学して別の学校に再入学しているの、二人が何としても恋愛を禁じようとする気持ちが理解できないわけではなかった。けれども、思春期特有の淡い恋愛感情には罪はないと考えていた私は、姪に対して、恋愛自体は構わないが、メイズの問題もあるし、今、妊娠するのも良くないので、そこは分けて考えるようにということを繰り返して話した。頭ごなしに否定するよりは、理由を説明して納得してもらおう方がいいと考えたのである。

ホームステイを終えて南アフリカを離れてから三年半後、再びピーターマリッツバーグ市を短期で訪れた私はガールフレンドに会いに行つた。残念ながら友人とはすでに別れていて、一緒に暮らした家も他人の手に渡っていた。子供達は元気に成長していたが、高校生だった姪は二人ともなんと母親になっていた。しかも一人は在学中の妊娠だった。その時は姪たちには会えなかったが、話を聞いてなんとも複雑な気持ちになってしまったのだ。

もう八年も前のことになる。博士論文執筆のため、南アフリカ共和国クワズールー・ナタール州ピーターマリッツバーグ市に滞在した一年のうち後半の六カ月強を、私はアフリカ人家族とともに過ごした。私を受け入れてくれたのは、政府の土地返還委員会に勤めていた友人の家族である。ここでは、友人宅でのホームステイを通じて感じた大家族の暖かさと苦労について述べたい。

友人（男主人）の家族の特徴は若い家族だということだった。友人は当時三〇代半ばで、ガールフレンドは二〇代後半の大学生。二人の間にはすでに小さな子供（四歳と二歳）が二人いたが、友人は小学生になる甥と高校生の姪の面倒も見ている。南アフリカのアフリカ人家族の間では、安定的に収入を得られる家族の成員が甥や姪と同居し、生活費や教育費を援助することがよくあるが、友人の家族もそうだった。

さとう ちづこ／アジア経済研究所アフリカ研究グループ

専門は、南アフリカ地域研究。  
主な著作に『南アフリカの土地改革』（日本経済評論社、2009）、  
『南アフリカを知るための60章』（共著、明石書店、2010）など。